
宵闇娘の地底旅

瓦礫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宵闇娘の地底旅

【コード】

N56780

【作者名】

瓦礫

【あらすじ】

宵闇の妖怪ことルーミア。ひよんなことから記憶を失くして地底へと迷い込んでしまう。

そこで橋姫こと水橋パルスイと出会い、ルーミアはパルスイと生活を共にしていく。果たしてルーミアは記憶を取り戻すことはできるだろうか。

地上と地底、正反対の二人が織り成すちよつとした物語。

第一章（前書き）

東方projectの二次創作です。ルーミアが主人公の話となっております。

時系列は非想天則〜星蓮船の間あたりとなっております。そのため、それに因んだ描写がばちばちとありますのでご了承ください。

第一章

眩しい日差しと時折、吹き抜ける風が風流を感じさせる初夏の季節の幻想郷。

妖怪の山は日差しを浴びた木々が深緑に染まり、風の吹くままにその体を委ねなびかせていた。

人里では農作業に精を出す者、無邪気に外を走り回る子ども達、市を開く商人など、どうも平和な様子が伺える。そして、妖怪の山からは天狗が韋駄天の如く空を駆け回り、新聞を号外していた。

これは幻想郷の何気ない一日の風景である。

場所は変わって幻想郷の地下、いわば地底界。

忌み嫌われた者たちが住まうもう一つの世界だ。人間は存在せず、鬼やその他の妖怪が住んでいる。

地獄という言葉が似合いそうな地底界だが、実際には鬼たちの陽気な酒盛りが日常茶飯事に行われている明るい場所でもある。

これから始まる物語は地上と地底、決して交わる事のない者同士が出会った、ちょっとしたお話だ。

妖怪の山に初夏の訪れが感じられる風が吹く昼下がりに。少し眩しいくらいの日差しが照りつける晴天に恵まれていた。しかし、そのなかに一際、その存在が映える物体が浮かんでいた。

ふよふよと重力に反した運動をしながら空中を漂っている黒い球体。風船のように風の吹くままにその身を委ねて漂っている姿からは目的意識すらも感じられない。

すると、その黒い球体はゆっくりと妖怪の山へと下降を始め、鬱蒼と茂る森の中へとその姿を消していった。

樹齡幾百年と歴史を感じさせるような樹木が所狭しと生えそろう、それに比例し藪が鬱蒼と生い茂っている。そのためか、木漏れ日が射すとはいえ、あたり一面が薄暗く、ここが妖怪が棲む山であるということとは、なるほど頷ける。

そして、先ほどの黒い球体はというと、木に何度も衝突し、その度に「痛い」「あうっ」などと声を漏らしながら低空飛行をしていた。内部に何か潜んでいる事は確かである。すると、その黒い球体はぴたりと運動をやめ、ゆっくりと地面に降り立った。

ざりつと土を踏みしめた重力があることを改めて実感させる音が鳴り、黒い球体は徐々に小さくなっていく。そして、人型の黒い影に姿を変えたのと同時に黒い影は消え去った。

「わはー」

黒い影の姿から幼い少女の姿に変わり、十字架を象るように両手両足を伸ばしながら深呼吸をした。

この少女こそ先ほどの黒い球体の正体であり、その名もルーミア。黒い服の胸元には赤いタイ。頭にはリボン、そして十歳に満たないくらいに黄色い髪と赤い目をした幼い少女の姿。しかし、彼女は正真正銘の妖怪であり、それも、そんな見かけに反した人食い妖怪である。黒い球体も彼女の持つ能力「闇を操る程度の能力」が作り出したものだ。

普段は空中をふよふよと飛んでいるが、こうして山に降り立つのには大きな理由があるからだ。

すると、その理由を明確にする音が彼女のお腹から響いた。

「お腹すいた…」

昼下がりという丁度、空腹を覚える時間帯である。そのためルーミアは食糧を調達するために妖怪の山へと降り立ったのだ。

もちろん食糧とは人肉：ではあるが、人里を襲って調達することはまず無い。襲ったとしても色々な方々による返り討ちに遭うのがオチだ。

基本的に彼女は旅人や迷い人、そして自分に害を成す人間を襲うが、そう簡単には遭遇することは無い。そのため、自ら「狩り」を行い、動物などを狩って空腹を満たしていることが多い。

ルーミアは食糧もとい、この時間帯でいうお昼ご飯を調達するため薄暗い森の中を彷徨い始めた。しかし、そう簡単にお目当ての獲物は見つからない。

「何もいないのかー」

鳴り止まない空腹音。よほど空腹であることを暗示させる。何でもいいから食べたいという欲求が呟きとして表れた。

低空飛行を搜索を続けることしばらく、ルーミアの視線が何かを捉えた。それは普通の鹿である。動物図鑑にも載っているような鹿であるが、その大きさはルーミアの2倍はあるであろう大型の鹿だった。

妖怪の山に生息する動物は大型のものが多く、妖怪の山に溢れる妖気が原因なのかは定かではないが、その大きさは今のルーミアの空腹を満たす分には十分すぎるサイズであり、やっと見つけたご馳走に彼女は目を爛々と輝かせていた。

「あれは食べてもいい動物？」

口元から垂れた涎をさつと拭き取り、呟く。そして足音出さないよう低空飛行で徐々に距離を詰めていく。

普通なら気配を感じて逃げ出すが、ここは妖怪の山。麓の森といえども人間が立ち入ることはまず皆無であるため人間に対する警戒心が緩くなっていたのだ。ルーミアも見かけこそは人間の少女その

ものである。そのため、ルーミアという肉食動物が迫っていることなど全く気付くことなく、草を食んでお食事中だった。

自分が食われるということも知らずに。

鹿の死角から接近して、数メートルまで距離を詰めたルーミアは持ち前の鋭い犬歯を光らせ狩りの体勢に入る。

狩りは一瞬が勝負の鍵。それを知っていたルーミアはタイミングを見計らい、低空でボバリングをしてその場で隙を窺っている。

鹿が再び草を咀嚼しようと首を地面に下げた刹那。

ルーミアは鹿を仕留めるため勢いよく首元へと飛び掛った。

しかし、あと少しという時であった。何かが勢いよく噴出すような音が響き渡った。

あまりにも唐突の出来事であったため、飛び掛ったルーミアの軌道はずれてしまい、鹿の身体に激突。鹿も音とルーミアの体当たりで驚き一目散にその場から逃走。狩りは見事に失敗に終わったのだ。

「あー…お昼ご飯…」

せつかく苦勞の末に見つけたご馳走は何処へと逃げ去り、狩りによつて体力を消費したため空腹感がさらに増し、ルーミアは落胆していた。

もう狩りをする体力も気力も残ってはいない。残ったのは何ともいえない空腹感と虚しさだった。

すると、再び、ぶしゅうう、と噴出すような大きな音が響き渡った。

「な、何なのかい？」

音の発生源はルーミアのいるあたりの近場で鳴っている。好奇心

に駆られ、音を頼りに辺りを探し始める。

探し始めて間もなく、何やら熱い蒸気と熱気が彼女の体を包み込んだ。それと同時に、ぶしゅう、と音が響く。

「暑いのかー…」

草木を掻き分け、額の汗を拭いながら進んでいく。すると、急に足元がぐらつくのを感じた。

ルーミアが辿り着いた先には熱い蒸気が地面から噴出し、噴出す衝撃で崩れた地面、そして蒸気と水溜りが取り囲む中心にぽっかりと開いた穴だった。

その穴からは熱気と同時に何かの匂いも漂ってくる。その見慣れぬ光景にルーミアは呆然と立ちすくむ。

しばし考え、この穴と匂いからルーミアはある結論に辿り着いた。

「何か食べ物あるのかな…」

空腹が頂点に達し、漂っている匂いから穴の中には何か食べ物があるのだらうと、そう判断したルーミアはある決心をした。

「よし、入ってみよう！」

この穴に入れば食べ物にありつけるだらうという期待と、穴の中には何かあるのだらうという好奇心がルーミアを動かし、穴の中へと誘う。

丁度大人二人分くらいの大きさの穴であり、体の小さなルーミアが潜る分には苦ではなかった。ふわりと浮かび上がり、ルーミアはゆっくりとその穴の中へと降下していった。

ルーミアが穴に入って数分後、茂みを掻き分けながら、誰かが穴へと近づいてきた。

「あー、やっぱり間欠泉だったか」

「梅雨明けたばかりだったしな」

呟きながら茂みの中から現れたのは、妖怪の山に住む種族の一員である河童だった。

二人組みの河童は開いた穴を間欠泉によるものだと判断した。

事実、この妖怪の山の地下には「間欠泉地下センター」という施設がある。地霊の異変後に山の神こと八坂神奈子の指導のもと河童たちによって建設されたらしい。

この間欠泉は間欠泉地下センターの一角で発生する地熱の影響により噴出したものであった。

「早いとこ穴を塞いじゃおうよ。八坂様に見つかったら面倒だし」

「そうだな、この大きさじゃ下手したら誰か落ちるかもな」

そう呟くと、二人組みの片方の河童はPHSのようなもので仲間に連絡をとり、もう一方は穴の寸法をメジャーで測っていた。

連絡後、すぐに仲間が駆けつけ様々な工具や穴を塞ぐための合金板などを取り出して一斉に作業に取り掛かる。

高い技術力を持つ河童だけにその作業は手馴れた手つきであり、せっせと穴を板で覆い、間欠泉の直撃で外れないように金属性の杭を地面にしつかりと打ち込み、バーナーのような工具で板を溶接していく。

そして五分もしないうちに穴を塞ぐ作業を終え、応急処置が成された。

「よし、これで少しの間はもつだろう」

「それじゃ早いところ戻ろうぜ、暑くて仕方ない」

その一言に満場一致。河童達はもうここにいる必要がないと判断し、すぐさまその場を後にした。

ルーミアが穴の中にいるということを知らずに…

一方穴の中ではというと、ルーミアは途方にくれていた。

穴の中はルーミアが作り出す闇の中と同じ暗闇で満たされている。外から射す光も元々薄暗い森の中であるが故に少し潜っただけで光は届かなくなっていたのだ。

「何もないのかー」

ルーミアの声が洞窟内に反響し、何度も木霊となり返ってくる。

この穴に潜ってどれくらいの時間が経つのだろう。最初こそはまだ辺りが確認できるくらい明るかったが、今では視界を遮る闇が広がるばかりだ。

ルーミアはこうした闇の中を進むことには慣れているが、こういつた場所に立ち入ることが今までなかったため、徐々に不安感や緊張感が込み上げてくる。

そして、洞窟内に充満する匂い、硫黄に近いその匂いが嗅覚による感知を阻害していることも加えると、右も左も分からない閉鎖的な恐怖をルーミアは無意識に抱いていたのだ。

「もう、いいや。戻ろう…」

本能的な恐怖を感じたルーミアは一旦、地上に戻ることにした。

ずっと潜ってきたから、あとは上に向かって飛んでいけばいい、複雑に入り組んでない縦穴式の洞窟だったため、岩壁に激突することなくルーミアは潜るときよりもずっと速いスピードで上昇した。

しかし、戻る途中に違和感を覚えた。

「あれ、出口どこ？」

気付けばあたり一面が闇。出口の付近では視覚で確認できるくらいの光は射すはずだが、そして振り向けば、そう複雑には入り組んでいないため、小さいながらも出口の光が見えるはずだ。しかし、その光は一切確認できない。

それもそのはず、出口は塞がれてしまっているのだから。

「え…どうしよう…早く帰りたいのに…」

不安が頂点に昇り、不安感と焦燥感がルーミアに重くのしかかる。そして耐え切れなくなったのか、目元に大粒の涙を潤ませて嗚咽を混じらせ泣き出してしまった。

「う、えぐ…チルノー、リグルー、みすちー、大ちゃん！みんなどこにいるのかー！」

友達の名前を呼ぶも、当然のことのように返ってはこない。ただ返ってくるのは反響した自分の嗚咽交じりの泣き声だけだった。

こんな場所に来るんじゃないかった、と後悔の念を募らせ泣き続けている。泣き声が辺り一面に反響して、より大きなものへとなっている。

しかし、その泣き声とは別に聞こえてくる音があったのだ。何かが勢い良く込み上げるような轟音。洞窟内の風穴を空気が通過するような音だ。

ルーミアはその音に気付いてはいない。反響した自分の泣き声し

か耳に入ってなかったのだ。

だが、それを気付かせるかのようにルーミアの足元から蒸気が湧き出した。

「ふえ？」

ぶわつと熱い蒸気がルーミアを包み込み、ルーミアの体勢が崩れた。そして、明らかに自分に迫ってくる熱気と音に彼女はようやく気付いた。

そして、体勢を整え、再びボバリングの体勢に持ち替えた刹那。

「わっ！」

凄まじい風圧と水流がルーミアを包み込んだ。そう、ここは間欠泉。温泉が噴出するのは当然である。しかも、この間欠泉は他の間欠泉より噴出す勢いが強力なものであったのだ。

激流ともいえる間欠泉はルーミアをまるで木の葉のように押し流した。

身体能力が優れている妖怪いえども、人間の子どもと同じくらいの身丈のルーミアにはその激流に耐えることができず簡単に押し流されてしまったのだ。

勢いよく込み上げる間欠泉。ルーミアはこれで地上に戻れると、少なからず期待をしていたが、その願いは決して叶わぬもの。

出口は河童達が施した合金板で塞がれている。無論、ルーミアはそれを知らない。上へ上へと押し上げられ、そして、その終着点が訪れようとしていた。

「うあっ！」

ずどん、と鈍い音が洞窟中に響いた。ルーミアは頑丈な鋼鉄の板に叩きつけられ、ものすごい衝撃が体中にはしった。

人間ならば大事に至っていたが、妖怪であるルーミアは何とか耐えることができた。しかし、その衝撃は凄まじく、ルーミアの意識を遮断するのには十分すぎる衝撃だった。

間欠泉は出口付近の風穴から蒸気が漏れ、その勢いが弱まっく。そして、完全に勢いを失った間欠泉は重力に引っ張られて再び地の底へと戻っていった。

ルーミアと共に。

ルーミアは今の衝撃で完全に意識を失い、失神していた。

飛ぶ事ができない上、彼女が居る場所は空中。このまま落ちていけば地面に落下してしまう。

恐ろしく深いであろうこの洞窟、もしそのまま地面に激突すれば妖怪いえども無事では済まないだろう。重力に引っ張られ、徐々に落下速度が上がる。そして最悪のシナリオへと向かっていく。

しかし、不幸中の幸い。ここが間欠泉であったためか待ち受けていたのは地面ではなく地下水脈だったのだ。

ざぶん。

勢いよく地下水脈に着水し、水面に浮び上がった。最悪の事態は避けられたが、ルーミアの意識は回復しないままである。

すると、地殻変動と間欠泉の衝撃により壁の一部が崩れ、水脈が流れ出した。ルーミアはその流れに身を委ね、地下のさらに地下に流されていった。

意識の戻らぬまま、彼女はどこに流れ着くのだろうか。

それは誰も知らない。ルーミア自身も知る由もなかった。

第一章（後書き）

初めまして。瓦礫という生物です。ここまで読んでいただいて本当にありがとうございます。

さて、今回は初めての投稿となります。ルミアがどうやって地底に迷い込むか、誰に会うかなど、色々と案を半年くらいこねくり回した結果、ようやく形になったわけですが、遅筆であるため投稿するのが余計に遅くなった気がしてなりません。

応援、批判、改善点などのコメントはとても励みになります。

これから、ちょびちょびと続けていきます。遅筆ながらも気長に書いていくので、今後とも宜しくお願いします。

第二章 前編

地底。奈落の底に位置するそこは、忌み嫌われた者たちと今では忘れ去られた鬼たちが住んでいるもう一つの世界だ。

旧地獄街道のいたる所に吊るされた赤い色の提灯からは、点つた蠟燭が灯りを放ち、旧都を色鮮やかに彩っている。そして、旧都からは鬼たちが酒の席で賑わう声が絶えず聞こえてくる。それは、忌み嫌われた者たちの住まう奈落の底という陰鬱なイメージを打ち消すかのような明るく活気に溢れたものだった。

そんな旧都から離れたところに位置する人氣が無く、一段と寂れた場所。ここは地上と地底を結ぶ縦穴。唯一、地上と行き来できるいわば地底の出入り口だ。

この縦穴のはるか下には一本の河があり、木造の橋がかけられていた。その橋の下には橋姫が住んでおり、いつもこの縦穴を見守っていた。

その橋姫の名は水橋パルスイといい、嫉妬心を操る能力を持つ。ショートボブの金髪から覗かせる尖つた耳と緑色の眼が特徴だ。嫉妬心を操るだけに彼女の嫉妬深さは地底随一とも言われており、何につけても二言目には妬ましいとばかりに尽きる。

深い嫉妬が生んだ鬼に嫉妬以外何を受け入れると…パルスイはいつも内心でそう思っていたのだ。

今日も彼女は橋に立ち、この縦穴を見張っている。それが彼女の日課であり役目でもある。

「おうおう、また橋姫がいるぜ、飽きねえよな一日あそこに突っ立てるんだぜ？」

「おい、あんまり茶化すなよ。今夜にでも丑の刻参りされちまうぞ」

旧都へと向かう側の方角から聞こえてきた若い男の声。旧都に住まう鬼の類であろう。

馬鹿にしたような笑みを浮かべながら橋へと近づいてきた、その鬼の二人組み。パルスィはというと、また来たかと言わんばかりに鋭い視線で睨みつける。

橋姫の本質ともいえる嫉妬深さに加えて、パルスィの愛想のなさが仇となり同じ地底に住まう者でさえ忌み嫌っているのだ。時には罵り、皆してパルスィを避けていた。この二人組みもその一員といえよう。

普通なら立ちすくんでしまいそうなくらい鋭いパルスィの睨みをもものともせず、にやにやとパルスィの反応を楽しむかのように茶化し続ける二人組み。緑色の目がさらに鋭さを増していく。

「何だ？橋姫さんは俺らに気があるのかあ？」

「うええ、俺は嫌だぜあんな鬼女はよ」

「お前、女欲しがってただろ？一丁抱いてやれって」

「死んでもそれはごめんだな」

無視していても立ち去る気配が無い。パルスィはそう確信したのかくるりと二人組みの方を向き、近づいていく。適当に弾幕でもふっかければ逃げ出すだろう。そう思い、パルスィは手の先に妖力を集中させる。緑色の光が集り怪しく光り始めた。

「おっと、橋姫さんが怒ったぞ！呪われる前に逃げようぜ」

「そうだな、なんとって相手はそれはそれはおっかない橋姫様だもんな」

散々パルスィを茶化した二人組みは下品な高笑いをあげながら旧都へと戻っていった。

うっとおしいものがやつと去った。パルスィは溜息を混じらせ自

分の持ち場へと戻る。そして親指の爪を噛みながら呟いた。

「人を馬鹿にできるその余裕が妬ましいわ……」

嫉妬の念を込めた独り言が縦穴の向こうへと向けられた。

かつては自分も地上で暮らしていた。しかし、歪んだ嫉妬と憎しみを抱き続けた結果、こうも橋姫として自分にかえり、この地底へと落とされてしまった。自業自得ともいえる報いである。

今の彼女には地上そのものが妬ましく思えてしまうのだ。橋姫故、その嫉妬が消える日は来ないのだろう。眉間にしわをよせ、思い出したくないものを思い出してしまったのかパルスィは滅入った。

そんな彼女の元へ誰かが近づいてくる。漆塗りの酒杯を片手にカラコ口と下駄の音を混じらせた足音と共にパルスィに近づく。

「よーす、パルスィ」

男勝りなその声にパルスィは耳を傾け、振り返ると、そこには一人の鬼がいた。

長く、きめ細やかな金髪と他の鬼と同様に額から角が生えている。彼女の名は星熊勇儀、地底に住まう鬼の一員であるが、彼女はかつて妖怪の山の最高位に君臨する鬼の四天王の一人であるらしく、赤く鋭い一角からは、四天王の風格が醸し出されていた。

「何の用、またひやかしにでもきたの？」

「いやあ、たまには旧都と一緒に飲もうかってな」

この二人は何かと一緒にいることが多い。むしろ勇儀が一方的に絡んでいるといっても過言ではない。パルスィは追い返してもキリが無いと察しているのか、渋々勇儀との酒盛りに付き合っているのだ。しかし、パルスィ自身は勇儀のことは毛嫌いはしておらず、自

ら一緒にいることもある。

しかし、酒盛りとなると旧都に足を運ぶ事になる。つまるところ、気分が滅入る場所に行くようなものだ。

「あんな連中と一緒に？嫌よ、酒がまずくなるだけだわ」

旧都に行つてもろくなことはない。陰口と耳打ちぐらいしか待つていないだろう。

それに先ほどのうつとおしい二人組みもいる、それどころか自分の相手をするものなど勇儀を除いて旧都には一人もいない。

それならば、いつそのこと一人である方が幾分も気が楽だ。

パルスイはツンとした愛想の無い返事で酒盛りの誘いを断った。

そんなパルスイの心境を察したのか、勇儀は彼女に詰め寄りながら言う。

「それじゃあ、ここで一緒に飲もうかい？」

急に勇儀の顔が目の前に迫り、酒の匂いがする熱い吐息がパルスイの顔にあたる。これには流石の彼女も驚き、面前に勇儀の顔があるのかパルスイの顔は一気に赤みを帯びていく。

「な、何言ってるのよ！誰があんたなんかと…第一今は仕事かなのよ！」

「はっはっは、そうかい、じゃあ後でならいいだろう？」

「分かったから早く離れなさい！」

杯を交わすことを了承してくれたことに、にこりと満面の笑みを浮かべて笑う勇儀に対し、未だに顔をどけない勇儀をなんとかどかさうとするパルスイ。すると、約束が成立したことに満足し、勇儀はすくつとパルスイの身長に合わせた前屈から姿勢をなおす。

「なら、また後で来るよ」

「分かったから早く行きなさい！」

「ふふ、それじゃあね」

パルスィに言われるまま勇儀は旧都へと戻って行った。次第に小さくなる勇儀の後を物寂しげに見つめていた。パルスィは橋の隅へと移動し、下に流れるせせらぎを眺めながら思いふける。

何故、勇儀は私にここまで接してくれる…嫉妬狂いの橋姫風情なんかのために。

忌み嫌われたものでさえ嫌う私のもとに来てはあれやこれやと、楽しませようと笑わせようとしてくれた。そんな勇儀を自分はいつも棘のある言葉で追い返している。

本当は傍にいてほしい。

素直になりたい。

しかし、橋姫故に底知れぬ嫉妬心が、募った想いを押さえつけ、拒み続けている。これが橋姫のさだめなのだろう。

パルスィは自分を見つめなおしてまた滅入り、言い出せない思いが脳裏を何度も交差する。

「…そういえば後で来るって言ってた」

しばし思いふけた後に勇儀がまた来ることを思い出し、パルスィは橋の下へと下りていく。

パルスィの家は橋の下にある。この縦穴を見張る仕事は睡眠、食事などを除いては外でぶっ通しの仕事だ。そのため、近辺に家があることは何かと都合がいいらしい。それに橋の上で杯を交わすのな

ら休憩も兼ねることになるため一石二鳥である。

「おつまみあったかな」

パルスイの向かう先に位置しているのは決して大きくはなく、一人が住むには十分なくらいの小屋だった。それがパルスイの家である。

向かう途中、ふと後ろを振り向いた。川上に見えたのは旧都の明かり。耳をすませば賑やかな声が微かに聞こえる。勇儀も今頃、他の連中と一緒に杯を交わしているに違いない。その様子を思い浮かべ、嫉妬とささやかな羨ましさを抱いた。

ざりつと川砂利を踏みしめ、家に戻ろうとしたその時である。

「なにかしら？」

川上から何かが流れてくる光景が彼女の目線の先に映ったのだ。

流れてくる物は大体決まっており、旧都で投げ出されたゴミか地底に生息する小動物の屍骸であろう。概ね前者の方が多い。

「また川に何か捨てたわね…全くどういう神経してるのよあいつらは…」

ぶつぶつと文句を吐きながら靴を脱ぎ、スカートをまくって川の中へと入る。深さはそれほどなく、一番深いところでも太ももがつかれる程度の浅さであり、温度も温泉が沸いた影響によるものである。うか、本来の冷たさよりは温かいものであった。

流れてきた物を拾い上げようとパルスイ自身もそれに近づいていく。近づくにつれて流れ着くものの形状などが鮮明になってくる。

そして、肉眼で確認できるほど近づいたとき、パルスイは目を疑った。

「え、嘘でしょ？」

流れ着いてきたのはゴミでも屍骸でもない、自分よりも背丈が低い子どもだ。仰向けに浮きながら流されている。

黄色い髪に鬼灯のような赤いリボンとタイ、そう、この子どもは数時間前に地下に迷い込んだ挙句、地下水脈にさらわれてしまった宵闇の妖怪ことルーミアだった。

実はこの川は上流にある地下水脈から成るものであり、あの間欠泉もこの川の水脈から発生したものだ。失神した直後、水脈の移動でルーミアは流され、こうしてこの場に行き着いたのだらう。

パルスイはルーミアを川から拾い上げ、抱きかかえると耳を口元に押し当てた。

「…まだ息があるわね」

微かに呼吸をしているのがパルスイの耳に感じられた。パルスイは急いで自宅へとルーミアを運んだ。息はあるものの昏睡状態であり、このまま放置しておくのは危険だ。そう判断し、濡れた衣服を脱がせ、横に寝かせ安静にするなどの応急処置を施していく。

何度も額や頬を触り、体温の有無を確認したり、寝息の様子をみたりとパルスイはしばらくルーミアのもとに付き添っていた。

それからして、しばらく時間がたった。意識が戻ったのか、ルーミアは重く閉じていた瞼をゆっくりと開かせた。

「気が付いた？」

ルーミアは声のする方に目を向けると、そこにはパルスイが座っ

ていた。

覚醒後のぼやけた視界。ルーミアは目をこじこじとこすり、視界を鮮明な状態に戻そうとする。

そして、ゆっくりと起き上がり辺りを見渡す。

「ここは？」

敷かれた布団の上、そして8畳くらいの部屋に古びた土壁と襖、ここがどんな場所なのかなど彼女に検討もつかない。そして、見知れぬ人物であるパルスィに問いかけた。

「誰なのか？」

「こういう場合、そっちが先に名乗るべきじゃないかしら？私は橋姫の水橋パルスィよ」

「ぱるちー？」

「パルスィ！変な読み間違いしないで」
「わはー」

最後の方が聞き取れていないのか、パルスィという読みを「ぱるちー」と読み間違えるルーミアに少し声を荒げるパルスィ。しかし、ルーミアは首をかしげた様子で本当に伝わったのかどうかすら怪しい。

パルスィは立て続けに質問を続けた。パルスィもルーミアとは初対面であり、名前すらも知らない。何故、先ほどのような状態になっってしまったかなどを問い始めた。

「で、あなた一体何があったのよ？あんな浅い川で流されるなんて」
「川で流される…？」

「覚えてないの？あなたはそこの川から流れてきたのよ？」

「分からない」

「見たところこころじゃ見かけない妖怪ね。名前は？」
「分からない…」

質問に対して全て「分からない」の連続であり、パルスィは眉を少し細めて問いかける。

「ちょっと、あなたふざけてるの？」

「分からない…分からないよ…ここどこ、私…誰なのか…？」

頭を抱え、必死に思い出そうとするも何も浮かばず、ルーミアはうずくまっている。それは、決してふざけてはいない、本当に分からないという訴えに見えたのだ。

「本当に何も分からないの？」

「うん…」

苦悩するルーミアとパルスィ。ルーミア自身も何も分からないとなると何の目星もつかない。

何の妖怪なのか、どこからきたのか、名前は何なのか、ルーミア以上に頭を抱え苦悩するパルスィ。それ以前にこの後、どうするかを必死に模索している。

その時であった。

「よーっす！約束通り来たぜー、パルスィー！」

「ゆ…勇儀！？」

家の外から聞こえた勇儀の声。いきなりの登場にパルスィは激しく動揺する。勇儀が来るのをすっかり忘れていたのだ。今この状況下で勇儀と会うのは色々な意味でややこしくなる。できれば整理が

ついでから打ち明けたいところであった。

「誰なのカー？」

「…いい？絶対外に出るんじゃないわよ？」

「そーなのカー」

ルーミアにそう言い聞かせて、勇儀に一旦、ここから退いてもらうよう伝えるために外に出た。

「ほら、いい酒が手に入ったんだ。一緒に飲もうじゃないか」

「あー、いやその、今はちよつと無理なのよ…」

「何だい、それじゃ約束はどうなるのさ？」

「ほら、だからまだ仕事中、というか…その…」

せつかく会いに来てくれたのに断るなんて罪悪感を背負いつつ今の状況を打開しようと必死になるパルスィに対し、勇儀はというと土壇場で約束を断られ不機嫌な表情浮かべ、理由を聞くことばかりにパルスィに詰め寄る。

「私と飲むのがそんなに嫌なのかい？」

「いや、それはすごく嬉しいんだけど…じゃなくて、今はその…」

「その？はつきり言わないと分からないよ」

「うう…」

自分よりもはるかに長身な勇儀に距離を詰められたうえに、この状況と雰囲気、何ともいえない威圧感に圧倒され、すっかりたじろいでしまい、もう逃げも隠れもできない、まさに袋小路に陥っている最中、パルスィの恐れていた展開が現実のものとなってしまう。

「ばるちー？」

ルーミアは二人のやりとりが気になり、我慢ならず玄関から顔を
出してしまった。もちろん勇儀の目に留まらないはずなどない。

パルスイは、あと一押しだったのにと苦渋の表情を浮かべていた。
これで話はさらにややこしい方向へと進むだろう。そう思い、色々
と諦めかけていた。

「おや、どこかで見た顔だね」
「え？」

まさかの一言にパルスイは耳を疑った。まさか勇儀が知っている
とは、予想もしていない展開である。

勇儀はルーミアをじつと見ながら自分の頭にあるルーミアに関する
記憶を探っていく。

うーんと唸りながら頭をポリポリと掻きながら頭の引き出しから
記憶を引き出そうとしている。そんな勇儀を不思議そうに見つめる
ルーミア、そして勇儀の記憶に答えがあるようにと願うパルスイ、
そのまましばしの沈黙がその場を流れた。

「思い出した！」

勇儀は何かを探り当てたのかそう言っ手ひらを打ち、パルス
イの方を向いた。

「勇儀、何を思い出したの？」

「この前、ミスティアの屋台で萃香と飲んだ時にその子を見かけ
たんだ」

「それで、この子の名前は…？」

「んー…確か、連れの連中やミスティアが呼んだ時は…その、るー、
るーみい…なんとか…」

その時、ルーミアは勇儀の発した言葉を口ずさんだ。

「るーみい、あー？」

「るーみあ…：そうだ、ルーミアだ！」

やっとのことで勇儀の記憶の中にある人物像とルーミアが一致し、名前と人物がかみ合ったのだ。

しかし、ルーミアはというと自分の名前であるということすらも分からず、ただ首を傾げているだけである。

「お前はルーミアっていう名前だ」

「ルーミアなのかー？」

「そうそうルーミアだ」

「そーなのかー」

特に動揺することもなく、ルーミアはただそうなのかと受け流すだけだった。パルスイもようやく名前と人物像の目星がつき、何といても目先に見えた幾多の混乱を回避できた事にホッと胸を撫で下ろす。すると、ルーミアは自分を見下ろす勇儀に話しかけた。

「お前大きいのかー、誰なのか？」

「ん、ああ、私かい？私は星熊勇儀っていうのさ」

「ゆーぎい？」

「そうそう」

「わはー」

ニコリと笑みを浮かべる勇儀に対し、ルーミアもそれに満面の笑顔で返した。パルスイはというと、何か気に食わない表情を浮かべている。そして、ルーミアに再び質問をする。

「名前が分かったなら、早いところ地上に戻ったらどうかしら？」

「ちじょう？」

「そうよ、あなたは地上の妖怪なんでしょ？」

「よーかい？私、妖怪なのかー？」

地上の妖怪であるルーミアがどうして地底に来たのか、その原因はおろか動機すらもパルスィと勇儀には見当もつかない。謎が深まるばかりで埒が明かず、ルーミア自身にあれこれと問い詰めても返事はきまつて「分からない」の一言であつた。

そればかりか自分が何であるのかすらも曖昧である始末なのだ。

「あなた…自分が何なのかすらも分からないの？」

「妖怪つて食べてもいいのかー？美味しいのか？」

「自分を食べる気…？あなたは正真正銘の妖怪よ」

「へー、そーなのかー」

大して驚くこともないルーミア。名前も分からないのなら自分の種族すらも分からない、そんなルーミアの様子を見て勇儀の脳裏に何かが思い浮かんだ。

「なあ、この子は記憶を失くしているんじゃないか？」

「記憶を失くしているって、どういうことなの勇儀？」

「んー…昔聞いた話なんだが記憶喪失とかなんやら、覚えていた事を全部忘れてしまつんだ」

「それじゃあ、この子は、その記憶喪失に？」

「そこまでは分からないよ。私は医者じゃないからね」

記憶喪失、それが今、ルーミアに起こっていると断定こそできないが、その可能性があるかとパルスィは判断した。このままルーミア

を放っておくわけにもいかない。記憶を戻す事は叶わないが地上に送る事が先決だろう、それに、このままだと自分の生活に影響が出る。そう思ったパルスィはルーミアを地上に帰すことにした。

「とにかく、ここはあなたみたいなのが来るような場所じゃないの。上まで案内するから付いてきなさい」

そう言うとパルスィはふわりと浮上し、ルーミアに後を付いてくるよう指示するが、ルーミアは浮上するパルスィを不思議そうに眺めていた。

「ほら、どうしたの？ぐずぐずしてないで早く行くわよ」

「すごいのかー！ぱるちー飛べるのかー！」

「何ふざけたこと言ってるのよ、あなたも飛べるでしょ？」

後ろを振り向き、なかなか付いてこないルーミアに言った。

パルスィの言うとおり、この幻想郷では空を飛ぶ事は大して珍しいことではないらしい。元々妖力の高い種族である妖怪や鬼なら妖力を集中すれば神仙術の修行をしなくとも浮く程度の事はできるらしい。人間も修行次第で飛べるとのこと、非常識が常識である幻想郷だからこそと言いつれる。

妖力があるもの同士、飛べて当たり前だとパルスィはルーミアに問うも、ルーミアの返事は首を傾げ、理解をしていない様子である。

「あなた、まさか飛ぶ事も分らないの？」

「うん」

飛ぶ事も分らない、本当に何もかもを忘れている。パルスィは今度は地上に送る手段も模索しなければと再び頭をかかえた。

すると、そんなパルスィを見かね、勇儀が言った。

「それなら、パルスィ、お前がこの子をおぶるなりして上に運んだらどうだい？」

「は？」

何で自分がそんな面倒なことを、と言わんばかりに聞き返すと、勇儀はにやにやと笑みを浮かべており、まるで何かを期待している様子だ。

「この際、それが手っ取り早いもんだらう」

「私があの高さまでおぶってけというの？嫌よ、そんな面倒な事なんて…」

「いいじゃないか、子どもをおんぶするなんて微笑ましくてさ」

「第一、私の性分にあわないわよ」

「そうか、なら仕方ないか…」

自分の性に合わないという理由を付けて断るパルスィにようやく折れたのか、勇儀は笑いながらルーミアに近づき、腰下ろした。そして背を向ける。

「ほら、乗りな」

ルーミアは勇儀の背中を見つめて何か迷った様子で指を啜えている。すると、ルーミアはパルスィの方へと駆け寄り、ぎゅっと袖を掴む。

「……！？」

「ぱるちーがいい！」

「え、何言ってるのよ！？」

「はっはっは、こっとなっちゃパルスィの役目だね」

勇儀はまさかのルーミアの選択と、きよとんとするパルスイを見て笑い、今の状況ではパルスイが適役であると言った。パルスイの方は結局、勇儀の案に押された上にルーミアからの指名で折れたのか、溜息を混じらせながら了承したようである。

しぶしぶルーミアに背を向けて腰下ろした。

「仕方ないわね…ほら、早く乗りなさい」
「わはー！」

ルーミアは抱きつくように勢いよくパルスイにおぶさった。その予想外の衝撃は中腰体制では抑えきれずパルスイはバランスを崩した。

「うわっと、もうちょっとゆっくり乗りなさいよ！」
「そーなのかー」

相変わらず満面の笑みで返すルーミアにパルスイの注意が伝わったのだろうか。

ルーミアをおぶるパルスイの姿と、二人に似通った髪の色と髪型からは、まるで姉妹のように見える。勇儀はそれが微笑ましく見えたのかくすつと笑みを浮かべる。

「何が可笑しいのよ」
「こうしてみると姉妹みたいだねえ」
「へ、変なこと言わないでよ！とにかく行ってくるからその間、橋を見張ってて」
「はいよ、行ってらっしゃい」

勇儀の一言にパルスイ顔を赤らめ動揺しながら言った。そして、

パルスィはゆつくりとルーミアが落ちないように浮上し、上へと向かう。勇儀はそれを見送っていた。

ルーミアをおぶっているためか、普段のスピードの半分も出ておらずゆつくり浮上している。この調子じゃいつになるやらと小さく溜息を漏らすパルスィ。

こうしておぶっていると服越しといえども肌と肌が密着しているためか、お互いの体温がほんのりと伝わり、背中には人肌を連想させる温もりが感じられた。ルーミアはその温もりを直に感じ、心地よい表情を浮かべている。

「ぱるちー」

「何？」

「ぱるちーあつたかい」

顔を背中に埋めながらルーミアはささやいた。そのささやきとルーミアの仕草にパルスィは照れたように顔を赤めていた。妖怪いえども子どもであるう、こうした温もりが恋しいのだろうか、とパルスィは思っていた。

縦穴も丁度、中間のあたりに差し掛かったときのことである。青白い鬼火が二人に近づいてきた。青白い鬼火が二人と当たり一体を怪しく照らしている。そして、それと同時に糸にぶら下がった少女と子ども一人入りそうな桶が上からぶら下がってきたのだ。

「やあ、こんな所で何してるんだい？」

「ヤマメ、ちよつと色々あつたのよ」

パルスィがヤマメと呼んだ少女は糸を手から出して蜘蛛のようにぶら下がっている。彼女はその蜘蛛のようなと形容できるとおり、

土蜘蛛という妖怪である。パルスイとは知り合いであるらしく、関わりも勇儀に次いで深いのである。勇儀との酒盛りにも参加することもあるらしく、パルスイと接点のある人物ともいえよう。

「色々か、上に用事でもあるの？」

「まあ、ね…」

すると、ルーミアは、またしても気になったのかパルスイの背後から顔を出した。

「おや、ここらじゃ見ない顔だねえ」

「え？あ、こら！また勝手に…」

ルーミアは初めて出会うヤマメを不思議そうに見つめていた。パルスイはというと、またしてもルーミアの行動が第三者に知れ渡るきっかけとなってしまったことに溜息をついていた。

だとしても、いずれ、こうなるとは心なしか予想はできていた。

「誰なのかー？」

「私かい？私は黒谷ヤマメ、土蜘蛛の妖怪さ。それで、こつちのちつこいのが…およ？」

「バケツなのかー？」

先ほどから辺りを照らす鬼火は桶の周りで発生しているようだ。中には何かが潜んでいるとおぼしき影が確認できるが、いつこうに出ってくる気配がない。

ヤマメは中に潜む者を引っ張り出すかのように桶の中に手を突っ込み、引っ張り出して顔を出させた。

すると、着物の襟を掴まれながら、白い着物を着た少女が桶の中から出てきたのだ。身の丈はルーミアと同じくらいであり、緑髪と

ツインテールが特徴的だ。

「ほら、恥ずかしくないで挨拶しなよ、キスメ」

「…あ、その…キスメです」

「わはー、私、ルーミア」

恥ずかしがり屋なのか言動がおどおどしており、挨拶が終わるとすぐに桶に顔の半分を埋めてしまった。余程内気なのだろう。

「それじゃ、挨拶が済んだならそろそろ失礼していいかしら？」

「どこかに行くのかい？」

「上よ。この子を地上に送っていくのよ、まあ、理由は後で話すから」

そう言って、再び浮上した時のことだった。ヤマメは呼び止めるように二人に言った。

「あー、穴なら塞がってるよ」

「そう、塞がって…って、塞がってるってどういうことよ!？」

「いや、だから上に開いてた穴が塞がってるんだよ。隙間が一つもないしね」

耳を疑った、まさかの予想を裏切る展開だ。何故、今まで開いていた穴がこうも唐突に塞がってしまったのか、またしても謎が生まれた瞬間であった。それ以前に一番の問題はルーミアを地上に帰せなくなったということである。

「まさか、あんた達が何かしたんじゃないでしょうね？」

「そんな悪戯なんてしないよ。第一、私らだって今見てきたばかりだってのに」

「そんな…」

もしかしたら、自分を茶化しているのかもしれない。ヤマメとキスメとの付き合いでは悪戯をふっかけられたことが何度かあった。もしかすると今回もそうかもしれない、そう思い、ヤマメを疑ってみるも、ヤマメは何もしていないと主張する。真面目に答えているのか、表情にもあらわれていた。

「ともかく、空中で話し合っても落ち着かない。一旦下に下りようよ」

ヤマメはそう言うと言った糸をゆっくりと伸ばし、下へと降りていく。キスメもどこからぶら下がっているか分からない縄を伸ばしてヤマメに付いていった。

「ばるちー？」

「仕方ない…戻るわよ」

「わはー」

Uターンをして、パルスイはもと来た道に戻っていった。

「穴が塞がるなんて…どうということなの？」

確認のため、振り返ってみても穴から射す光が微塵も感じられないことからヤマメの言っていることが事実であると受け止めた。

予想外の展開に今日一番の溜息を漏らしている最中、ルーミアは相変わらずパルスイの背中に顔を埋め、心地よい気分のなかで笑みを浮かべていた。

第二章 前編（後書き）

前回の投稿から数えるとかかなり遅れてしまいました。どうも、こんにちわ、瓦礫です。

やっと話もメインの舞台に入ったことで地霊殿の面々を出す事ができました。

どうも勇儀とパルスイのカップリングの気がありますが、一応、友達という設定で通していきたいと思います。

地底や旧都とかの雰囲気が出ていれば幸いです。何か矛盾点などがありましたらビシッと指摘していただくと今後の執筆の励みになります。

あと、今回の二章はどうも長ったらしいので前編と後編に分けました。そのせいか、どうも前編の区切りがしっくりこないような気がします。

まだまだ続きます。半端ない遅筆なのにさらに続きます。

ここまで目を通していただいて本当にありがとうございます。では、これからも宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5678o/>

宵闇娘の地底旅

2011年1月13日17時02分発行